東京ジャーミイ金曜日のホタバ

２０１２年6月８

宗教と科学のつながり

親愛なるムスリムの皆様。

人がこの世界で幸福で安らぎに満ちた生を送るために、宗教的な価値観と科学的な働きが必要となります。教えとは、崇高なるアッラーとのつながりを整え、何を行うべきで何を行うべきではないかを私たちに教え、善行と罪、ハラールとハラームについての知識を与える価値観の体系です。したがって宗教の目的とは、人とアッラーとの結びつきを確固たるものとし、真の意味での幸福へと導くことです。

科学は、自然界における被造物や事象が、どのように、どのような形で作用しているのかを見出し、解明する活動です。行為の責任を負う形で創造された人間は、周囲で起こっている事柄について無関心でいるわけにはいかないのです。だから人が科学に対して否定的であることはもちろん考えられません。クルアーンは人間の注意を、アッラーの存在の証拠である自然界へと向けています。一部の、興味深い自然界の現象について言及し、これらについて熟考するよう招いているのです。崇高なるアッラーは次のように仰せられています。「本当に天と地の創造、昼夜の交替、人を益するものを運んで海原をゆく船の中に、またアッラーが天から降らせて死んだ大地を甦らせ、生きとし生けるものを地上に広く散らばせる雨の中に、また風向きの変換、果ては天地の間にあって奉仕する雲の中に、理解ある者への（アッラーの）印がある。」（雌牛章１６４節）

世界は均衡を伴った形で見出され、理解されうる秩序と規律をもって創造されました。これは崇高なるアッラーの、人間への最も大きな恵みです。なぜなら世界に規律がなく、理解されることのない存在であったとすれば、この星は私たちに安らぎをもたらす故郷となることはなかったでしょう。

イスラームは、人間に理性を用いて世界における諸作用の法則や規律を見出すよう命じています。このようにしてアッラーの力と崇高さを明らかにすることが尊い責務として課せられているのです。

またクルアーンは、「全ての知者の上に全知なる御方はいる。」（ユースフ章７６節）と語り、知識が無限のものであることを示唆しています。イスラームの教えは、発展を望み、新たな展開を奨励する原則で満たされています。したがって、私たちを日々、より発展させる科学的な努力に十分な価値をおくことは、ムスリムとして宗教上の注意深さの要するところです。同時に、知識がいつでも人間的・道徳的価値観を尊重するものであることにも重要性を置いています。

親愛なるムスリムの皆様。忘れてはいけないことは、今日において知識は最大の、そして最も影響力の大きい力の源であるということです。知識をよりよく得ているひとは、より強く影響力のある立場に上がるのです。強いだけの力は、知識の力の前に屈している状態です。学者の見解は、何千人もの勇者を倒すだけの力を持ちます。知っている者と知らない者とは同じではないということを何世紀も前から述べてきていたクルアーンは、この状況を示してきたのです。

黄金時代のムスリムの学者たちはこの神聖な真実をとても良い形で受け止めていました。彼らは宗教的な知識にとどまらず、数学、医学、物理学、化学、植物学、天文学といった学問の分野でも大きな成功を収めました。多くの見解を実現させてきました。イブン・シナー、イブン・ルシュド、ファラービー、ビルーニー、アリ・クシュジュ、アブー・バクル・アル・ラジー、ジャービル・イブン・ハッワン、そして何百人もの学者が、世界の文化史にその名を残しました。今日私たちのなすべきことは、彼らの成功を自慢することではなく、彼らの文化的見解を復活させ、今日の科学や技術の水準に達することです。フトバを預言者さまのハディースによって締めくくります。「知識を得ることはムスリムの男女の義務である」